

海軍

上海海軍特別陸戦隊

断腸の終戦

滋賀県 武村 正男

昭和二十年六月二十三日沖繩の守備隊が玉砕して、いよいよ次は本土かとの感慨深くなる。暗号書のあて名の基地・艦船名がだんだん少なくなっていくことにただならぬ事は察していた。広島、長崎に原爆投下、ソ連参戦と仕事上知った。

その八月九日、支那上海の江南造船所の棧橋にいた私は工作船乗組みの支那人から奇怪な言葉を聞いた。

「シーサン、トンヤン、プシン、ワラワラワンラ、

先生、東洋（日本）駄目、争いは終了了。私は怒鳴った。「ニデ、ソツ、プシン、チョビツ、シヨタワ、お前話したら駄目だ、殺すぞ、わかっただか」「うん」とうなずいたけれど、周囲の空気はこれを伝えていた。

八月十五日、朝から暑そうな日であった。

『午前十一時発、連合艦隊司令長官（海軍大将豊田副武）、着各艦隊、通報上海海軍特別陸戦隊司令官

（海軍少将勝野実）、本日正午のラジオを通じて、

重大放送がある。各員に伝え聞くようにされ度し』

私は直ちに日高隊長に届ける。隊長は「電報ノ各兵員室にスイツチを入れ、全員兵員室に集まるよう分隊士に届けよ」私は「全員兵員室に集まるよう分隊士に届けます」隊長「うん」と。正午前全員集合した。

ラジオから流れてきた声は、「……世界ノ為大平ヲ開

カント欲ス……サレド幾多英靈及ビ遺族ニ思イテ致ス時痛恨ニ耐エズ……」と。昭和十六年十二月八日の『天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祖ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ明ラカニ忠誠勇武ナル爾佑衆ニ示ス……』の時の言葉や声とは思えない別人のような、時にはかすれ、時には消えるような、低い涙声のように……やはりか、そうであつたかと、一同落胆と茫然ともつかぬ形で、しばらく動かなかつた。

課業始めのラツパが鳴つた。隊長は「皆も今聞いたとおりであるが、勝野司令官より何分の沙汰あるまで統いていつものようにやつて貰いたい、くれぐれも軽はずみな事のないように」と。司令部に直行、しばらくして再度集合、隊長より「皆聞け、支那方面艦隊（司令長官、海軍中將福留繁）は最後の一兵まで戦う、続いて築城（防空壕等迎え撃つ準備）作業にかかれ」とまたひとしきり動揺があつたが、先の時より皆明るく、やるぞと言う表情で「やれやれ」という声も出た。八月十六日晴、午前八時「今日の日課、昨日の続き」かかれ、午後課業始めのとき、三時に集合の令が

出たが、これからの作戦説明くらいに思つていたし、午後三時全員集合、上海海軍特別陸戦隊（上陸）司令官がお見えであると隊長が前置きした。

上陸司令官勝野少将はゆっくりと、「諸氏は昨日聞いたと思うが、支那方面艦隊は最後の一兵まで戦う決意であつたが、大本営より本国が持たないので耐えて虜囚の恥を偲んで、日本再建に努めてもらいたい。頼む」と哀願する口調であつた。

戦いは終わつた。武装解除も済み対岸の浦東に移り、假住居を作り出来上がる頃には他からもぞくぞくと集まり、総勢五千人と言われ、皆帰るのには三年、食糧は十カ月、腹の減る事はするなと。

そのころ、八月三十日付けで中国新政権（汪精衛）で、日本軍再武装の通達が出たとの噂が流れた。九月上旬、二隻の砲艇に中国兵二名を含む二十名（一隻十名ずつ）乗組み、艇長を務めることで、対岸との連絡・収容所の監督官の送迎等をする事になった。

九月の彼岸も終わりだなあとと思うそんなある日、アメリカ合衆国の第七艦隊が黄浦江の目の前に投錨した。

それまでは広いと思っていた江上も戦艦や航空母艦に中央を占拠されると側面を航行する船舶は大変である。私たちの艇から五十メートルくらいの所に空母、その前後に戦艦が縦に並んだ。その向こうは前も後も遠くて見えない。それまでには「三笠」「吾妻」ぐらしいか見ていないので、あまりの大きさに啞然とした。

三日目だったと思う、旧日本軍の上陸用舟艇「五百トンぐらい」が航行中誤って戦艦の鎖に引っ掛かった。と、突然戦闘ラッパが鳴り一斉射撃態勢に入った。射撃には至らなかつたが、主砲をはじめ副砲側砲の臨戦態勢作りを見ながら過ぎし日を思い出していた。そのころ、艦隊乗組みの米兵が負傷した、弾は三八式小銃弾、犯人を出せ、わからなければ、責任者出てこいと。先に通達があつたが、武装はしていない、犯人はいない。身代わりは出ると言つても出してはならんと、司令官を対岸に送つた。

三カ月が過ぎ、迎えに行つた。艇指揮の出港の言葉に、まだお見えでないでしょうと言つと前を指差した。

そこには送つた時と全く姿の違う人がいたが、降りられるとき、向い合つて苦痛の程を想像した。

中国海軍の兵隊との日々もだんだん慣れてきたが、代わりに気ままが出てきた。その者は日本語はだいた分かるようで言葉に支障はなかつた。「汪、余りやかましくこせこせするなよ、この乗組員は皆一緒だが、ごてごて言つたら艇諸とも生きていない、初めより承知だ、そのつもりでいてくれ」と言つた。「分かるか」「うん、分かつた」とそれから人間が変わつた。昭和二十一年四月二十三日、第三回目が帰り、私たちを含む二百名が残り、四千八百人が引き揚げたので、艇を中国に渡して降りたら次の仕事が続つていた。道路工事六三〇メートル。小倉茂三郎特務大尉は「私に任せてくれ、悪いようにはせんから」と言うので皆同意した。しばらくして「皆、聞いてくれ、貴方たちの方でさせると言うならそれでもよい、銃を突き付けても動かんだろう。私に任せてくれるなら二百三十メートルは保障する」と言つたら、「任す」に決まつた。

皆早く帰れるよう努めてもらいたいと、皆よしやる

うと、道路も出来たと思つたら倉庫作業が待つていた。五千人十カ月の食糧、我々二百人の分を残した他の食糧をどこかへ運ぶ積込み作業、麻袋一袋百キログラム（日本の一俵六〇キロで一・六倍）、肩に乗せてもらい運ぶことができない者も大勢いるが、できる者がする。できない者は、他の仕事をするので、終わらねばならないと、皆頑張った。

そのころ、だれとなく帰れるらしいとの話があちらこちらでささやかれるようになった。五月二十五日、乗船の日が決まった。五月二十五日、乗船米軍LST（上陸用舟艇）。乗船手続き等あり、明日午後一時呉淞へ出発と、その夜、「明日はお別れです、日本には別れるとき送別会をしますね、今夜はお別れ会お酒を持って来ましたが、つまみは倉庫の缶詰で、辛抱してください」と四斗樽三丁が抜かれ、我々はびっくり仰天した。

俘虜監督所副官・汪中尉は大阪で中学卒業、陸軍士官学校も出て日本の生活がほとんどで、言葉も我々よりきれいなくらい、一人だったが、この夜は間近に迫

る最後の一夜になるであろう別れに、時間のたつのも忘れていた。後にして思えば、監督官周大佐も副官と同じ陸士の先輩、もう一人は王海軍中佐（日本海軍兵学校卒）。このような人々の下に生活できたことが、他の引揚者とは苦勞の度合いが少なかったのだろうと後で感じた。

五月二十三日、昨夜のお礼と共に乗船中に知り合った中国人、再び見ることもないであろう景色とも見えなくなるまで、両方が手と帽子を振りながら呉淞に向けて浦東を後にした。

五月二十四日、雨、以前に建てられていた良い場所であったため雨が中に入ることはなかったが、奥地から引き揚げた陸軍の人々は、いつ出発するのか予定もなく待つている天幕の中へ雨が入るので、困っていたがどうしようもない。

五月二十五日、晴、横になっていただけの一同は荷物を出したり入れたり落ち着かない状態。十時出発、九時乗船、八時検閲集合。仮寝の毛布など、陸軍の人に皆渡し、その人たちと別離を惜しみ、異郷の地に二

年十カ月二十三日の思いと共に永久にさらば、上海よ
：思い出を残し：棧橋の横の方に少し離れて乗船を待
つ人々と別れをした。陸軍の人たち、心なしか寂しそ
うに見える。

また双方が見えなくなるまで帽子を、手を振ってい
る。見えなくなり視界が変わった、そこには船が沈ん
でいる。あちらにもこちらにもと。輸送船が駆逐艦が
貨客船のようなので、乗っている船が通れるかなと思
う程。昭和十八年八月に通ったときは何一つなかった
この海に、見えない所の物も含めたら、想像を絶する
ような状況で船と運命を共にされたであろう幾多の
人々を偲び、冥福をお祈りするとともに敗戦の実感が
少しずつよみがえってくる。

報道の内には入らなかったのか、他が大きくて？無
傷と思っていた近くでこのような状況だ。国内はどう
なんだろう、船は沖へ沖へと、かもめの姿を見ても敵
機、芥の端切れを見ても潜水艦と神経をとがらせるこ
ともなく、ゆったりと遠くを眺めたり、ゴロ寝をし
たり、わずかな時間で別れ別れになる同僚との語り合い

と、そこには様々な姿が、展開している。

この頃になってジフテリアが発生したので、注意す
るようにと。ジフテリアは伝染病なので、上陸は二週
間延期。さあ大変だ、とにかく体に気を付けること。

五月二十八日、晴、夕方山口県仙崎沖に投錨した。
夕陽の彼方の島に港が見える。ふとだれともなく歌い
出した。『波の瀬の瀬に揺られて揺れて』。だんだん声
が増えてくる。『：月の潮路のかえり船：』いつか二百
人の大合唱になった。『讀む祖国よ、小鳥の沖にやー
：』このようなことが何日も続いた。病気の伝染もな
く。

六月十二日、早くから騒がしい上陸の日である。棧
橋は豪州兵が数名、少し行くと検疫で、DDTの散布
に体も荷物も真っ白になったが、検査も型通りで、何
事もなく仙崎の駅に着いたが、汽車に乗ることができ
ない。小倉大尉が交渉から帰って来た。

「皆聞いてくれ、交渉の結果、二車両を借りその他
へは絶対乗らないと約束してきた。狭いだろうが、辛
抱して間違いないように秩序ある行動をしてもらい

たい、重ねて言う、間違いのないように」

と、内地の混乱は想像を遙かに超え、荷物の上に百名が乗った車両へ他からまた押し入つて来る。出入りは窓からで、乗降口は押しでも入れない、外の手摺りにはぶらさがっている。なるほどなあ；理解とも諦めともつかぬまま辛抱するしかなかった。

少しづつ人が減つた。夜十時ころ、下関に着き車両切離しの停車、互いに再会を誓いながら別れの言葉になつた人も多い。九州方面と別れて一路山陽線を東へ、午前三時半ごろ広島駅通過、夜明けの市内を見て驚愕した。一面の大焼野原。その凄惨さはニュースによる想像を遙かに超えていた。

昭和二十一年八月、東京に向かう途中、九時間臨時停車で市内を眺めた時の記憶に残っているものは、つぶれかけた「ドーム」の残骸だけが、わずかに残るくらいで他には何も無い。明石のホームには鉄骨の建物が崩れたまま放置されていた。あれを見、これを見ながら無条件降伏への道をたどらざるを得なかつた状況が、改めて脳裏に一つずつ詰め込まれて行く中を、我

が家には午後二時半ころ着いた。

役場へ報告に行き、三年十カ月の死出の旅路は終わった。時に六月十三日午後四時、葉山村より一緒に入団の四名中（志願兵一人）他の三名はいずれも白木の箱で先に帰つていた。終戦の日に亡くなつた者もいる。三日後に霊前に無言の対面をした。

思いもよらず 我一人

不思議に命永らへて……

終戦満五十年を迎え往時を偲び、犠牲となられた方々の御冥福をお祈り申し上げますとともに、飽食時代、大消費時代を一考しなければと思ひます。

北方・オホーツクの海は波荒く

愛知県 佐久間 千鶴夫

舞鶴港を出港して進路を北に一路北上し、青森県下北半島・海軍の要港大湊に投錨したのは、昭和十七年十一月の天気晴朗な早朝であった。第一水雷戦隊の最